

第2図 第1次・第5次調査トレンチ平面図

大半が自然河道SD4805・4806で占められていた。この自然河道は埋土の状況から大きく上・中・下層の3層に区分でき、古式土師器は中・下層から多量に出土した。これらは河道斜面に貼り付いたようなものと、流出したような状況のものが見られたが、後者も著しい磨滅は認められなかったことから、投棄された位置から著しく動いていないと判断される。これらの土器群が多量投棄されている理由については不明であるが、第5次調査の際に導水管が2点出土しており、水辺の祭祀に伴う土器の投棄の可能性がある。また、木製品も大半が中層から出土している。

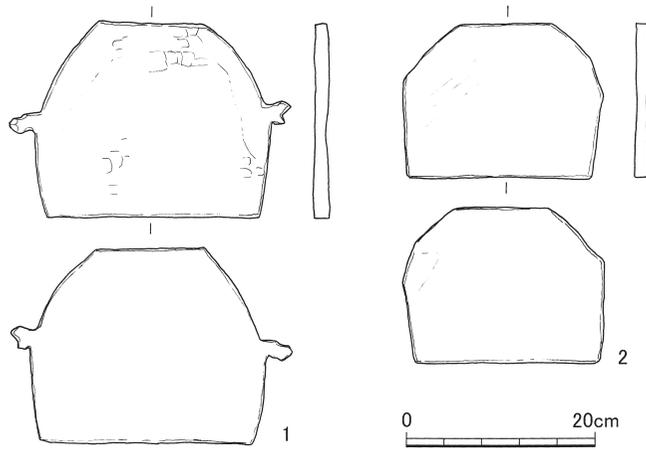
②木製品(第3図) 自然河道SD4805から出土した木製品としては木棺小口板・有頭棒状製品・鋤先(未製品)・広鋤(未製品)などがある。このうち木棺小口板(1・2)は材質がコウヤマキで年輪年代測定が可能な資料であったことから、奈良国立文化財研究所(当時)に年輪年代測定を依頼した。年輪年代測定に供された資料は1である。1は平面形は蒲鉾形を呈し、幅75.2cm、高さ51.6cm、厚さ4.4cmを測る。両側辺の中位付近に柄状の突起を1つずつ有する。突起は長さ3.5~4.5cm、幅2.5~3.0cmを測る。2は幅53.4cm、高さ41.0cm、厚さ3.4cmを測り、1よりも一回り小さい。2は柄状の突起を有さない。

1は、年輪年代測定の結果、コウヤマキの暦年標準パターンAと照合し、残存する最外年輪が西暦339年に形成されたものであることが確定された。この年代は伐採年代を示すものではないし、資料自体が加工品であるから、どの程度外縁部が失われているか定かではない。しかし、以下に紹介する土器資料の年代を考える上で十分参考になると考える。

③土器(第4~6図) 出土した土器はいずれも古墳時代前期の土師器で、いわゆる布

留式に属する土器群である。ここでは、木棺小口板と同時に出土した第1次調査出土資料を紹介したい。^(注3)

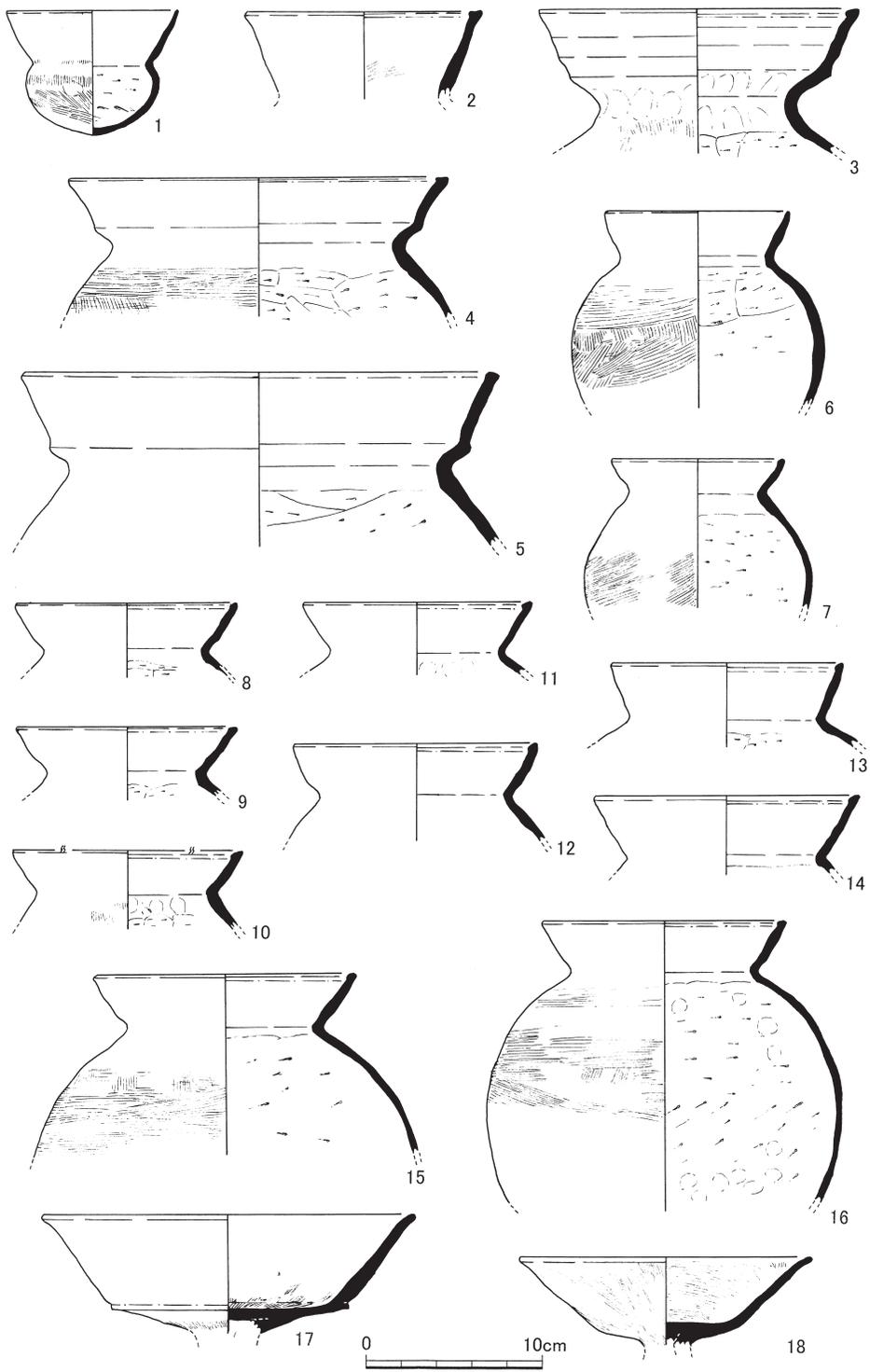
1～36は自然河道S D 4805から出土したもので、1～21は下層、22～36は中層から出土した。1は小型丸底土器である。口径が体部最大径を



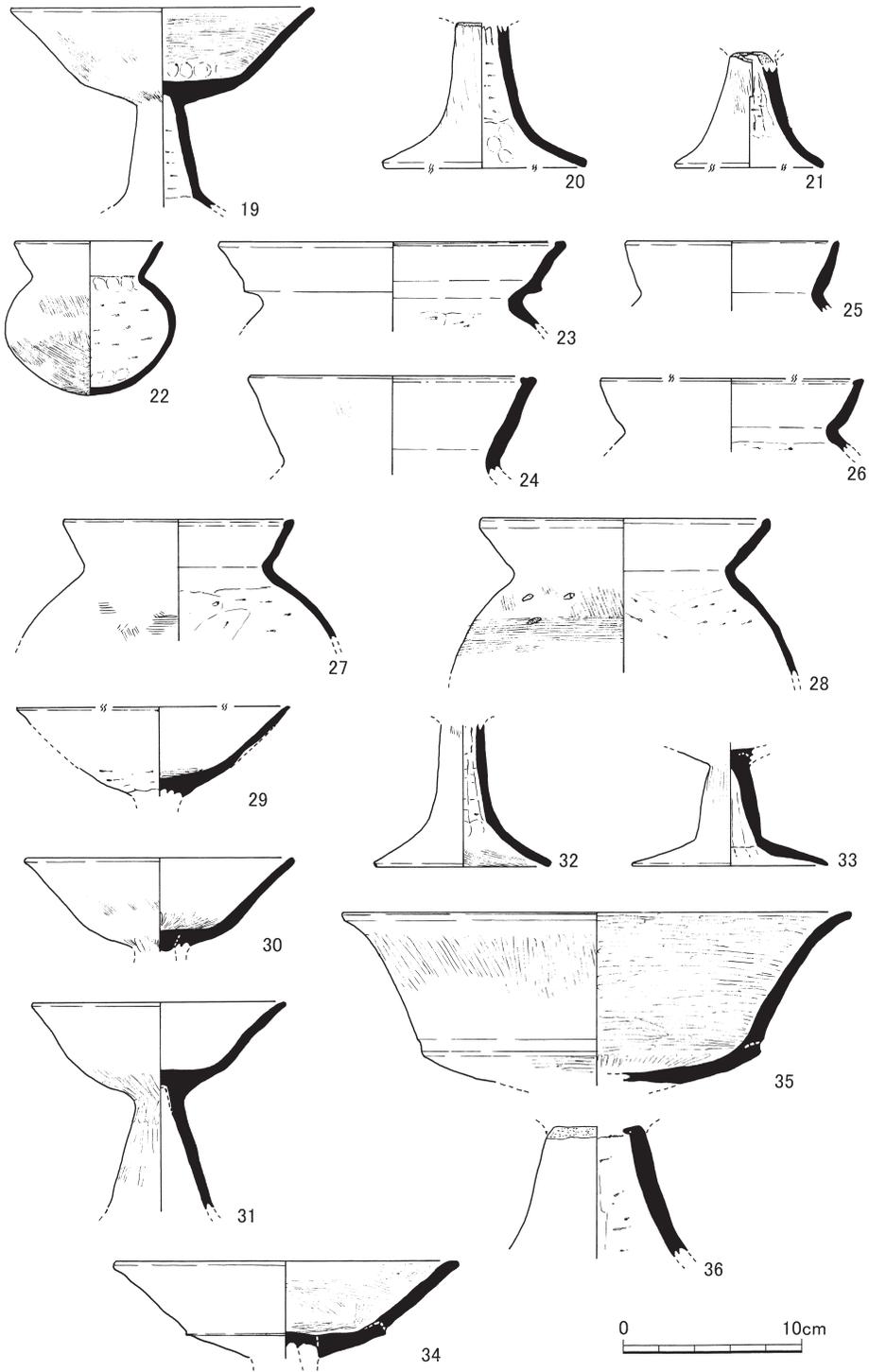
第3図 木棺小口板実測図

上回る。外面にハケ調整を施す。2は直口壺である。口縁端部がやや内方に肥厚気味で、端部に面をもつ。3は二重口縁壺である。口縁端部内面が肥厚し、頸部は緩く「く」字状を呈する。4・5は山陰系の複合口縁を呈する壺もしくは甕である。体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施す。6は口縁端部が丸くおさまる甕である。口縁部はわずかに内湾気味を呈する。体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施す。7～16は口縁端部内面が肥厚するいわゆる布留式甕である。体部外面はハケ調整、体部内面はケズリ調整を施す。甕の大半は外面に煤が付着する。17は大型の高杯杯部である。杯底部内面にハケ調整を施す。杯底部から杯口縁部への立ち上がりには明瞭な稜がある。18・19は高杯である。杯部の内面はハケ調整、外面はハケ調整の後ヨコナデ調整を施す。19の脚部内面にはケズリ調整を施す。20・21は高杯脚部である。19～21の脚部うち、20の外面はミガキ調整の可能性のあるものの、全体にハケ調整のものが多。

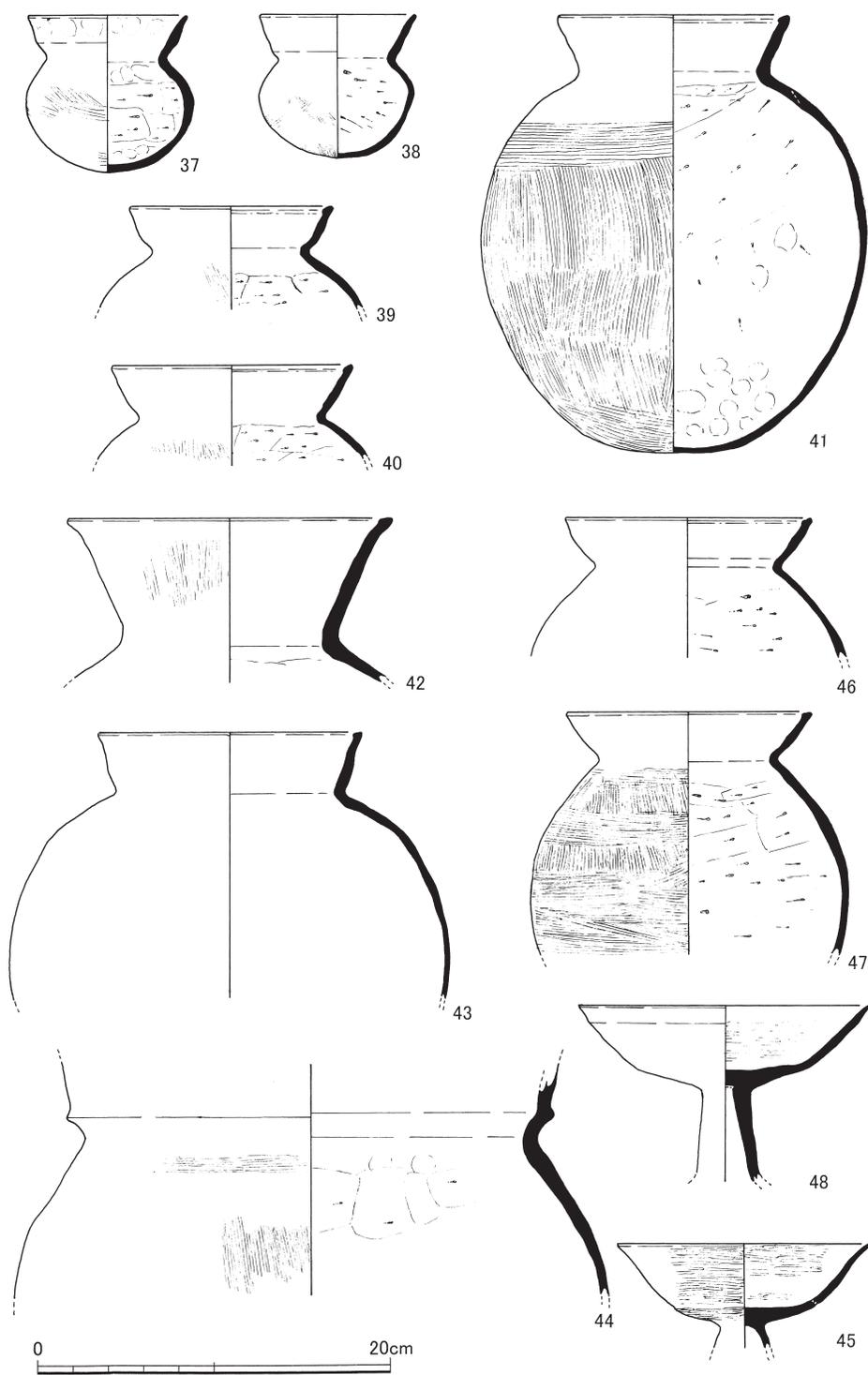
22は小型丸底土器である。体部最大径が口径を上回る。23は山陰系の複合口縁を呈する壺、24は直口壺である。ともに口縁端部内面は肥厚する。25は口縁端部が丸くおさまる甕である。26・27は内面が肥厚するいわゆる布留式甕である。体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施す。28は口縁端部を上方につまみ上げるが、端部を丸くおさめる甕である。いわゆる布留式傾向甕である。体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施し、刺突文が認められる。29～31は杯部の稜が不明瞭なもの、34は杯部の明瞭な稜を持つものである。30・31は杯部や脚部にミガキ調整が認められる。34は杯部内面にハケ調整を施す。32は緩やかに開く脚部、33は屈曲して開く脚部である。35・36は大型高杯で、両者は直接接合しないものの、同一個体である可能性が高い。杯部内外面ともミガキ調整を施す。脚部外面は調整不明であるが、内面にケズリ調整を施す。



第4図 第1次調査出土土器実測図(1)



第5図 第1次調査出土土器実測図(2)



第6図 第1次調査出土土器実測図(3)

37～41は自然河道S D4806から出土したものである。37・38は小型丸底土器であるが、口径と体部最大径がほぼ同じものである。外面にハケ調整を施す。39～41は口縁端部内面が肥厚するいわゆる布留式甕である。体部外面はハケ調整、体部内面はケズリ調整を施す。いずれも煤の付着が著しい。41はほぼ完形に復原できた資料で、口径13.0cm、器高24.8cmを測る。

42～45は溝S D4807から出土したものである。42は直口壺である。口縁端部が面をなし、わずかであるが肥厚気味を呈する。43は口縁端部が肥厚する布留式甕であるが、全体に器表面の磨滅・剥離が著しく調整は不明である。44は山陰系の複合口縁を呈する甕であろう。体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施す。45は杯部の稜が不明瞭な高杯であるが、杯底部と杯口縁部の接合痕跡がみられる。杯部の内外面ともにミガキ調整を施す。

46～48は土坑S K4808から出土したものである。46・47は口縁端部が肥厚する布留式甕である。46は器表面の剥離が著しいが、47は外面全体に煤が付着する。48はやや不明瞭ながらも杯部に稜が認められるものである。全体に磨滅気味であるが、杯部内面と脚部内面にミガキ調整の痕跡が残る。

3. 資料の検討

①出土土器の検討

瓦谷遺跡第1次調査で出土した土器について、若干の検討を加えたい。ところで、近年、南山城地域では、京都府久世郡久御山町に所在する佐山遺跡で、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落遺跡の調査が行われ、出土した土器について調査担当者の高野陽子氏は佐山Ⅰ式～Ⅳ式に大別し、さらに各式を2～5段階に細分した(合計16段階^(注4))。瓦谷遺跡と佐山遺跡は直線距離で約20km離れており、同じ木津川水系とはいえ、瓦谷遺跡が遺跡の立地上、大和地域の周縁部に当たることにも注意を要するが、以下では佐山遺跡の調査成果にもとづいて瓦谷遺跡出土資料を検討したい。

まず、瓦谷遺跡の各遺構出土の土器について、佐山遺跡の器種分類を当てはめてみたい。自然河道S D4805では、下層に小形丸底鉢A 2(1)、短頸直口壺A 2(2)、二重口縁壺E(3)、二重口縁壺Eないし甕H(4・5)、甕F 2 a(6)、甕F 2 b(7～16)、高杯M(17)、高杯L 2ないしL 3(18・19)があり、上層に小形丸底壺B(22)、二重口縁壺Eないし甕H(23)、短頸直口壺A 2(24)、甕F 2 b(26～28)、高杯L 2ないしL 3(30・31)、高杯K(33)、高杯M(34・35)などがある。

自然河道S D4806では小形丸底壺B(37・38)、甕F 2 b(39～41)がある。溝S D4807では短頸直口壺A 1(42)、甕F 2 b(43)、甕H(44)、高杯K 2(45)がある。土坑S K4808

では甕F 2 b (46・47)、高杯K 2 (48)がある。

さて、以上の遺構において確認できる器種としては、二重口縁壺E・短頸直口壺A 2・甕F 2 b・甕H・高杯K 1ないしK 2・高杯L 2ないしL 3・高杯M・小型丸底壺Bなどがある。これらの器種構成から、佐山編年のおおむね佐山ⅢB-1式に相当すると考えられる。高野氏は佐山ⅢB-1式を古相と新相に細分しているが、今回紹介した資料ではこれらを細分するまでには至らなかった。また、若干古い段階の資料も含まれている(小形丸底鉢A 2など)ことから、1～2段階古い時期のものも予想される。ただ、取り上げた資料の内容から、主たる時期が佐山ⅢB-1式に併行する段階であることは疑いない。

なお、この佐山ⅢB-1式は既存の編年観によると、寺沢薫氏の矢部編年では布留^(注5)3式に、都出比呂志氏の編年観では布留式^(注6)新相に位置づけられる。

②出土土器の実年代とその意義について

以上のように、瓦谷遺跡第1次出土資料は、おおむね佐山ⅢB-1式に位置づけられることが確認できた^(注7)。そして、上述のように、これらの資料と同一層位で出土した木棺小口板材(第3図1)の年輪年代の測定結果から、これら資料の実年代が西暦339年以降であることが明らかになった。これは、年輪年代の測定を行った木棺小口板は、外縁部が残っていなかったため、339年に少なくとも数年から十数年分の年代を加える必要があるからである。

いずれにしても布留3式の実年代がこの西暦339年に数年から十数年分の年代を加え、さらに廃棄までの時間幅を考慮すると、4世紀第3四半期を中心とする可能性が高いと指摘できる。

これまでの推論に大きな齟齬がないとすれば、本資料の持つ意義は大きい。なぜなら、これまで布留式初頭の資料として大阪府堺市下田遺跡出土のヒノキ製の腰掛け天板の再利用品の年輪年代が西暦^(注8)247年、須恵器出現期の資料として、佐紀遺跡(平城宮朝集殿下層)溝S D6030出土資料の板状の木製品の年輪年代が西暦^(注9)412年などが知られていたにすぎず、その中間、すなわち矢部編年の布留2・3式(布留式中相・新相)の時期を示す資料は知られていなかったからである。

筆者は、以上の点、ならびに後述する③項の資料の検討結果等も踏まえて、布留3式の年代を、4世紀の中頃から第3四半期にかけてと考えたい。

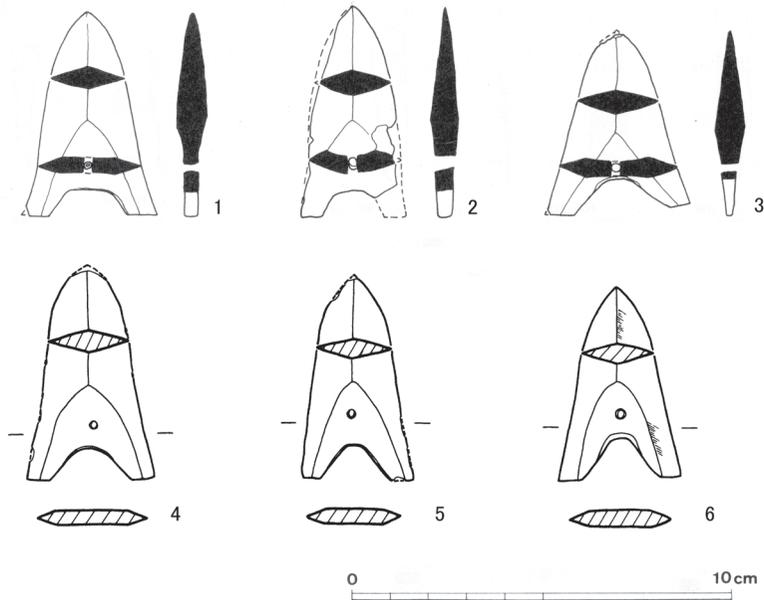
③同時期の年代推定資料について

次に、上記の年代観を補完する資料群の紹介と簡単な検討を行いたい。基本的には瓦谷1号墳に関連する資料であり、筆者の上記年代観を補完するとともに、古墳時代前期後半

の年代をも推定する手がかりとなるものである。

a. 木棺小口板と瓦谷1号墳について 伊賀高弘氏は、瓦谷1号墳の報告の中で、木棺「小口板の形状と法量が、瓦谷1号墳第1主体の棺床粘土に残されたラインと規模がほぼ一致する」と述べている。^(註10)伊賀氏自身はこの木棺小口板が瓦谷1号墳のために製作されたものとは述べていないが、この所見は重要である。すなわち、この木棺小口板が瓦谷1号墳、あるいは後続する古墳のために製作された可能性もあるからである。確実な根拠のあるものではないが、仮にこの推定が正しいとするならば、瓦谷1号墳は4世紀の中頃から第3四半期にかけての築造と推測されるわけである。ちなみに、瓦谷1号墳は副葬品の内容や各種埴輪から、古墳時代前期後半の築造と考えられている。

b. 大阪市一ヶ塚古墳出土板材の年輪年代について 大阪市の長原古墳群中の一ヶ塚古墳は、直径46.5m、周濠幅13mを測る造り出し付きの円墳である。同古墳の周濠を調査した際に出土した板材の年輪年代を測定したところ、西暦343年の年代を得たと言う。^(註11)この年代は瓦谷遺跡出土の木棺小口板の年代に近いが、周濠から出土した遺物の大半は埴輪で、土器はほとんど含まれていないため、直接比較することが困難である。ただ、一ヶ塚古墳出土の埴輪は瓦谷1号墳出土の埴輪と類似することが指摘されており、円筒埴輪編年ではともに川西編年の第Ⅱ期に位置づけられる。ただ器財埴輪のうち盾形埴輪をみると、やや



第7図 瓦谷1号墳・大成洞13号墳出土鎌形石製品実測図
1～3：瓦谷1号墳出土、4～6：大成洞13号墳出土

瓦谷1号墳の方がより写実性が高く、古い特徴を持つように思われる。いずれにしても板材の年代である西暦343年以降、一定の時間幅の中に川西氏の円筒埴輪編年第Ⅱ期の資料がおさまる可能性は高い。

c. 瓦谷1号墳出土の緑色凝灰岩製鏃形石製品について 瓦谷1号墳の第1主体からは緑色凝灰岩製の鏃形石製品が出土している。これと全く同形態のものが大韓民国慶尚南道金海市に所在する大成洞古墳群中の13号墳から出土している(第7図)^(註12)。申敬澈氏は、その陶質土器の編年で、13号墳出土土器を第Ⅲ段階に位置づけた^(註13)。年代推定の過程は省くが、第Ⅲ段階を4世紀第2四半期に位置づけられるとした。つまり、申氏の見解によれば、瓦谷1号墳は4世紀第2四半期に位置づけられることになる。これまで述べてきた資料からは、4世紀第2四半期の早い時期は無理でも、後半の可能性は全くないとはいえない。ただ申氏の陶質土器編年の年代観は、日本側の年代観と相違する点が多く、瓦谷1号墳の年代観が近づいたからといって、ただちに申氏の陶質土器編年を肯定することはできない。今後さらに検討を行っていく必要がある。

4. まとめ

以上、瓦谷遺跡第1次調査出土の布留式の土器群と、年輪年代測定ができた木棺小口板について、改めて紹介するとともに、若干の検討を行った。布留式土器群については、近年新たに知られた南山城地域(久御山町佐山遺跡)の資料と比較しながら、広域編年として用いられることの多い寺沢編年の布留式3式に位置づけられることを明らかにした。

そして、その実年代が4世紀の中頃から第3四半期である可能性を指摘した。この年代観は、布留式初頭や須恵器出現期の年輪年代の成果、あるいは他地域出土資料の年代観との比較検討を通じて、おおむね整合性のあるものと判断した。

土器資料の報告と年輪年代測定の結果は、1987~90年にかけて行われたものであり、すでに20年以上が経過しているにもかかわらず、ほとんど注目されてこなかった。しかし、今日の古墳時代の実年代論研究の現状を踏まえると、実年代資料のほとんどない時期でもあることから、世に問い直すという意味も込めて、本稿の執筆に至ったものである。

本稿で扱ったテーマや結論については、意見の異なる方々も多いことと思う。さまざまな視点からの御批評を乞う次第である。

(つづい・たかふみ=当調査研究センター調査第2課調査員)

- 注1 第1次調査：伊賀高弘「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要(1)瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987
第2次調査：伊賀高弘「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要(2)瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989
第3次調査：伊賀高弘「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要(3)瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1989
第4次調査：伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成元年度発掘調査概要(2)瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991
第5次調査：伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要(2)瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991
第6次調査：有井幸幸「木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要(3)瓦谷遺跡・瓦谷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1994
第7次調査：石井清司ほか「木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要(1)瓦谷遺跡第7次」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1995
瓦谷古墳：伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要(1)瓦谷古墳」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991
- 注2 光谷拓実『年輪に歴史を読む』(『奈良国立文化財研究所学報』第48冊 奈良国立文化財研究所)1990
- 注3 上記のように第5次調査で全面的な調査を行い、多数の土器が出土したが、膨大な量になるため、資料の全容を明示するのは別の機会を持ちたい。なお、内容的には、1次調査出土資料とおおむね同時期と判断される。
- 注4 高野陽子ほか『佐山遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003 97~135頁
- 注5 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊 奈良県立橿原考古学研究所)1986
- 注6 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会)1979
- 注7 瓦谷遺跡出土の古式土師器の時期について、各概報では寺沢氏の布留2式あるいは、布留1~3式という見解が示されているが、高杯Mや小形丸底壺Bなどが認められることから布留3式、すなわち佐山ⅢB-1式を主体とし、一部布留2式段階の資料が含まれるものと考えたい。
- 注8 光谷拓実「ヒノキ製腰掛けの年輪年代」(『下田遺跡』(『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第18集 (財)大阪文化財調査研究センター)1996
- 注9 光谷拓実・次山淳「平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代」(『奈良国立文化財研究所年報(1999-I)』奈良国立文化財研究所)1999
- 注10 伊賀高弘「瓦谷1号墳について」(『瓦谷古墳群』(『京都府遺跡調査報告書』第23冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1997 126頁
- 注11 松本百合子「一ヶ塚古墳(長原85号墳)」(『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅺ』(財)大阪市文化

財協会)1997 33～34頁

- 注12 申敬澈ほか『金海大成洞古墳群Ⅱ』(『慶星大学校博物館研究叢書』第7輯 慶星大学校博物館)2002 23～47頁(なお、筆者が利用したのは、2002年刊行の日本語版である)
- 注13 申敬澈「金官加耶土器斗編年」(『伽耶考古学論叢』3 財団法人駕洛国史蹟開発研究院)2000(なお、筆者が利用したのは、和田晴吾編『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』(2007)に掲載された日本語訳である)
- 注14 近年の古式土師器の実年代に関する議論は下記研究会ならびに文献にまとめられている。
研究会:「古墳出現期の土師器と実年代」(2003年3月8・9日開催、(財)大阪府文化財センター主催)
文献:『古式土師器の年代学』((財)大阪府文化財センター)2006 本書は上記研究会の記録集・総括として編集されたものである。